

平和川柳 虹のひろば

選評 十八世川柳 平川柳 (東京 川柳会 主宰)

6月9日、気象学者の増田善信(1923〜2025) 理学博士が101歳で逝去されました。心よりお悔やみ申し上げます。増田博士が広島原爆後の「黒い雨」の降雨範囲を分析した「増田雨域」は「黒い雨」訴訟での新たな認定基準の根拠となったものです。

増田博士は2023年9月5日発行の『平和新聞』(第2330号)の「平和川柳」欄にお題「境」で次の一句を投稿され、入選されました。

「増田雨域」の境に住みてまた訴訟

この「平和川柳」には「増田雨域」の提唱者である増田博士ならではの、増田博士だからこそ「境」への深い「想い」、「怒り」が吐露された川柳作品で、『平和新聞』の当欄への初めての投稿でした。翌、2024年1月5日に発表された第4回「平和川柳」優秀作品賞(人位賞)に選ばれています。

また2024年11月5日付の『平和新聞』(第2366号)の「平和川柳」には次の「自由律川柳」ともいえる痛烈な社会風刺の「平和川柳」が入選しています。

放屁一発新首相の東アジアNATO構想消えてモクズに

この鋭い「穿ち(うちがち)」の精神をもった「平和川柳」は2025年1月、全国新春特別号で発表された第5回優秀作品賞(人位賞)に選ばれています。

今月のお題は「あがる」です。以下、入選された作品を鑑賞してみましよう。

- 太陽に近づきすぎて溶ける羽根 (山口県下松市、下村 由美子)
- 「増田雨」もう永遠にあがらない (松江市、加茂 京子)
- 雨域の増田氏磊落辛辣な句と天に (静岡市、吉見 ハルカ)
- 骨揚げで一生分が物語る (奈良県橿原市、樽井 道子)
- シャッター街蝕み老舗上がった (大阪市、近藤 正)
- 上がるのは物価と血圧温度計 (静岡市、大牧 正孝)
- 備蓄米ガザとは違う声あがる (静岡市、富田家 一郎)
- 給食も唐揚げ一個物価高 (和歌山県海南市、こまっぴ)
- 防衛は先制攻撃紙一重 (静岡県磐田市、磯部 典子)
- 12式ミサイル富士の空高く (静岡市、渡辺 正寿)
- 物価高怨嗟の声のあがる日々 (埼玉県春日部市、福家 駿吉)
- 上がる値に作る農家も苦悩する (静岡県磐田市、磯部 忍)
- きな臭さ匂いに慣れて戦さ道 (岡山県倉敷市、瀬屋 祐司)

今回投句された川柳作品の多くは「物価高」や気象変動で続く猛暑を題材にしたものが多く寄せられました。その中で2句、増田博士の逝去と「辛辣な句」を偲ぶ作品がありました。また今回の「あがる」の題で特に印象に残ったのが「溶ける羽根」の川柳でした。この川柳作品を読んで、ギリシア神話に登場する「イカロスの翼」を思い出しました。イカロスは父である発明家のタイタロスが蜜ろうで作った人工の翼をつけて空を自由自在に飛ぶ能力を得ましたが、父の忠告を忘れて太陽に接近しすぎたために蜜ろうが溶けて翼がなくなり、墜落して死んでしまいました。この物語は人間の傲慢さや愚かさを描いた寓話としてさまざまな文学作品に影響を与えました。この川柳の作者は「イカロスの翼」を題材に戦争を起し、人間を大量虐殺(ジェノサイド)する人間の愚かさを風刺しているのでしょうか。

あなたの川柳をお寄せください▽来月のお題は「あんばん」▽お題に添ったものでなくても、広く平和に関することなら結構です▽自作未発表のものを3句まで。住所・氏名(雅号の場合は本名も)・電話番号を明記の上、メール・FAX・郵便はがきのいずれかで、ご投句をお願いします▽締め切りは7月15日(火)です。



気象庁気象研究所を退官後の1989年、広島への原爆投下直後に降った「黒い雨」の範囲を、従来考えられていた広さの約4倍とする論文を発表した。「増田雨域」と呼ばれ、広く被爆者と認めよう求めた住民らが勝訴する根拠の一つになった。

古い雨域の調査をした気象技師に、被爆者の認定範囲を狭める意図はなかったと考える。だが、「結果的に、範囲を絞りたい政府の主張の材料に使われた」とみた。

知らぬ間に権力者に利用され、誰かを苦しめてはいないか。そんな視点の源流は、自身の戦争体験にあった。

44年に海軍に入隊し、出雲の大社基地で気象観測や天気

海軍で見た空 繰り返さぬため

図の作成に従事した。戦争末期には特攻機も見送った。ある時、沖縄へ飛び立った特攻機が「積乱雲に阻まれた」と基地に戻った。指揮官から「もっと正確な予報を」と言われ、データを基に反論した。すると、指揮官に「もういいんだ」とさえぎられた。ハッとした。「みんな本当は死にたくないんだ」。指揮官もそれをわかったうえで、発言に違いなかった。「でも当時の私はそんなことさえ分からなくなり、若者を死地に送り込む仕組みの一部になっていた」

2021年、日本学術会議が推薦した会員候補を当時の菅義偉首相が任命拒否した際には、撤回を求める6万人超のネット署名を集めた。「科学者が戦争に協力させられた時代を繰り返してはいけない」という思いからだ。

最後に私が取材したのは今年3月。ウクライナ戦争やトランプ政権誕生などで核抑止論がますます力を持ち、核廃絶の機運がしばみかねないと危惧していた。「困難であっても核抑止に頼らない道を模索し続けてほしい。それが被爆国日本に課せられた使命ではないか」

(武田啓亮)

3月、「批判的に物事を見るのが科学者の基本だが、簡単なことではない」と語った。東京都狛江市の自宅

序 破急



前田史郎

社会社説担当

90歳をすぎると足腰が衰えるものだが、この人は違った。6月に101歳でなくなった元気象庁気象研究所室長の増田善信さんだ。5年前に都内の自宅を訪ねた時には3時間、話をした後、驚くほどの健脚で駅まで送ってくれた。

その年の夏、気象情報が戦時中に軍事機密だったことを社説で書いた。増田さんは当時を知る貴重な生き証人だった。太平洋戦争の開戦時、新人測候所員として勤務中、中央気象台（現気象庁）から届く電報が突然、暗号化されたことに気づく。天気図の作成に必要な風速や気圧を乱数表で解読することになり、住民にも天気予報を発表できなくなった。

「しけを心配する漁師にも空模様を伝えられず、つらかった」と語った。

警報や被害情報がないと、備えや救助もままならない。1942年8月に西日本を襲った周防灘台風の死者・行方不明者は千人を超えた。44年の昭和東南海地震は今も被害の詳細が定かでない。戦時下の人災ともいえるだろう。

「天気予報は平和の象徴」が持論だった増田さんの遺品に、手あかで汚れた2冊の大学ノートがある。気象庁を退職

101歳気象学者の重い「遺言」

後、広島への原爆投下直後の「黒い雨」の降雨域を調べるため、現地を訪れ作成した記録だ。「大粒の雨をトタン板でよけた」など、生々しい証言が並ぶ。

突き動かしたのは、国の調査が乏しいなか、住民の声に向き合う科学者の信念だったと思う。89年に発表した「増田雨域」は、放射性物質を含む雨で健康被害を受けたと住民らが訴えた裁判で、広島地裁から「豊富な資料に基づき、降雨域を推知する際の有力な資料」と評価され、住民側の勝訴につながった。調査が多くの人を救う一助となった。

百寿で伝記の出版にも力を入れ、「気象学者 増田善信―信念に生きた101年」（小山美砂著）が秋に世に出る。

都内での通夜に参列した東京慈恵医大名誉教授の小沢隆一さんは、日本学術会議の会員候補として推薦され、任命拒否された6人の1人だ。政府の対応に抗議して任命を求めるネット署名を1人で立ちあげてくれた増田さんに感謝し、「若々しさと明晰さが衰えない、行動する科学者だった」と、別れを告げた。

天気予報は命を救うためのもの。敗戦80年に「遺言」の重みをかみしめる。

熱心で人に優しい研究者

誤嚥性肺炎のため 6月9日死去・101歳

増田先生と初めて出会ったのは1987年6月。当時、私が町議を務めていた旧広島県湯来町(現・広島市佐伯区)の大部分は、45年8月6日の米軍による広島原爆投下後に放射性降下物を含む「黒い雨」が降った雨域として認められておらず、原爆被害を訴える人たちは救済の対象外だった。雨域拡大を求めて国に何度も交渉に行ったが、相手にされなかった。

そんな時、「現地調査をしたい」と支援団体に電話してきたのが増田先生だった。東京から気象学者が来るなんて想像もしていない。前日、来訪を町内放送で伝えた。集まるのは30人程度と思っていたら200人近く来て驚いた。



—前田梨里子撮影

増田先生は黒い雨を浴びたと証言する数百人分の手記を事前に読み込んでいた。当日は住民らに自前のアンケート用紙を配った。参加者のそばで証言の内容を細かくメモしていた姿を今も覚えている。

救済を求める住民らによる裁判が2015年により、定期的に打ち合わせしていたが、弁護士らへのアドバイスと言ひと言に以前と同じ力を感じた。先生の研究結果は有力な根拠の一つとなり、原告勝訴につながった。

増田 善信さん

広島原爆「黒い雨」を調査した気象学者

司法判断を受けて、22年に政府は黒い雨被害者の救済範囲を拡大した。しかし、それでも救済の枠から外れた人たちも、今も司法の場で争っている。2、3年前まで、「黒い雨の資料を送ってもらえないか」と時々電話がかかってきては郵送した。きつと、救済拡大に向けて研究を続けていたのだろう。几帳面で熱心で人に優しい研究者だった。(原爆「黒い雨」被害者を支援する会共同代表・牧野一見)

悼む

8/18 毎日

連載が始まった「プロレス

追悼抄



毎週木曜掲載

わた

文化部 池田創

亡くなられた方々

- ▽童話作家 立原えりか（本名・渡辺久美子）さん
（7月1日、虚血性心不全で死去、88歳）
- ▽フリーアナウンサー 栗村智さん
（8月2日、慢性腎不全で死去、71歳）
- ▽米宇宙船アポロ13号船長 ジム・ラベルさん
（8月7日死去、97歳）

気象情報は戦争で人を殺める道具となることもあるが、戦争で傷付いた人を救う手立てにもなる。そのことを体現した生涯だった。

1941年12月の太平洋戦争の開戦は京都府の観測所で迎えた。軍用機や軍艦の運用に不可欠な天気予報は軍事機密とされていた。一般市民に知らせることができず、もどかしさを感じた。戦争末期は海軍基地で働き、戦闘機の乗組員に戦地の天候などを伝える任務を担った。

気象情報は平和のために使われるべきだ。そんな思いは、戦時中の経験で培われた。

戦後、気象庁で予報官や気象研究所の研究室長を務めて84年に退職すると、原爆による放射性物質を含んだ「黒い雨」の降った範囲を調べ始めた。

「黒い雨」援護者広げた論文



90歳を超えても原爆忌には毎年広島を訪れ、被爆者と交流していた。「増田雨域の外側にまだ救われていない人がいる」と言い続けていたという—並木啓子さん提供

契機は85年、広島市で原水爆禁止世界大会の国際会議に参加したことだった。

黒い雨の降雨範囲を巡って国は当時、終戦直後の調査に基づき、「爆心地から北西に19キロ、幅11キロ」と規定。援護制度の対象をその範囲に限り、対象から漏れた被爆者から不満の声が上がっていた。

「雨というのは、範囲がきれいに決まって降るので

増田善信さん

元気象庁気象研究所研究室長

6月9日、誤嚥性肺炎で死去、101歳

それから約30年後の2007年7月。援護対象外の被爆者ら84人が広島県などに被爆者健康手帳の交付を求めた訴訟の判決で、広島地裁は論文を採用し、県などに交付を命じた。

「他の調査結果に比べて豊富な資料に基づいている」。判決は論文をそう評価した。原告団長だった高野正明さん(87)は「先生のおかげで多くの人が救われた」と感謝する。

研究は晩年まで続いた。自宅のパソコンの脇には常に、被爆者の声を記したノートがあった。長女の並木啓子さん(73)は「父にとっては一生の仕事だったのだでしょう」としのぶ。「増田雨域は未完成だ。救済すべき人はもっといる」。病床で最後までそう語っていた。(東京本社社会部 井上勇人)